

# 飛驒白川巡禮

長谷川久一

フランスのデュランと云ふ學者は、同國のアヴェイロン地方に於ける都鄙人の頭蓋係數に關する調査の結果、都會人に長頭型（頭の短徑を額の長徑にて除し百を乗したる係數の小なるもの）が多く、農民にはこの反對の短頭型が多いと發表してあるが、其の後の研究によると、都會人に長頭型のもが多く、田舎に短頭型の人が多いといふことは、事實認め難いのみならず、頭の形狀と或る心理との間に、一定の相關關係の存することも頗る疑はしいと云ふ結論が見出され出した。なるほど離村により或る種の系統傾向のものが都會に出で、他のものが田舎に残留するといふことは大體に於て言ひ得られるから、従つてそれが都鄙人の心理に何程か影響を及ぼすこととなり、この限度に於て、農民心理の先天素質説は認めらる可きであるが、吾人の一層多く認め得る見解は所謂環境説であつて、農民に特有の心理は、自然的社會的環境の産物、かくして生じた心理の固定化せられたものと考へる説に

他ならぬ。蓋し農民の働く場所は、都會人の如くビルディングの一室でなくして、雄大な大空の下であり、且つ種々の事實を單なる讀書見聞によつてでなく、手足、筋肉全身を以て學びとるのであるから、その經驗は都會人に比して、一層根柢深く、實質的であるから、都會人の知識經驗の單なる似非知識、一知半解の淺薄なものとの其の選を異にする。唯其の視野は狭小なるを免れず、農民は自然その直接の經驗以外に屬する間接經驗の範圍内に於ては、認れる意見、偏見、迷信によつて誤られ易いから、前記デュランの如く先天素質説を固執せんとする學者もある譯である。加ふるに農業はある程度迄人力を盡した後は、自然の成行にまかせるといふ諦めの習慣を生じ易い。蓋し農事の收穫は、人力に因るといふより、大部分氣候、天氣其の他自然的事情に懸るところが大であるからである。併しこれが爲めに勤勉着・實の徳性が生ずるから、農村の堅實性を増す結果となる。而して經濟價値に對する農

民の判断は、一般化・分量化的ではなく、特殊化・性質化的であると言へる。例へば金銭に就てみるに、その出所の異なるに従つて別種のものと思はれ、その使途もまた異なるといふことがある。山の樹木や家畜を賣つて得た金は財産造成に充てられ、野菜を賣つて得た金は日々の小遣ひに使はれるといふ風なことがある。

貯蓄に當つても、都會人が年四分五分の利子で、自分自身少しも與り知らぬ他人の事業に投資するのと異なり、節約の結果餘資を貯蓄し得たら、將來土地を購入して、農民一般にとつて特に強烈な土地所有欲を満足せしめ得べく、家畜を購入することに因つて將來自分の勞役を軽減するの仕合せを感じる等その節約・貯蓄の効果が目に見えて的確・切實に感ぜられるから、農民は大なる貯蓄者となるに相應はしい。而して農民の主要な生産手段たる土地は、勝手に移轉せしめることの出来ない固定したものであるから、之を相手に勤勞する農民も、やはり同じ土地に定着しなければならず、自らそこにあの山この田と云つた觀念が生じて、爲めに農民は土地に對し愛着と執着を感じ、或は人間と土地との間に奇しき因縁が出来、都會では、誰某はどの會社の重役だ、どの大學の教授だと言はれるのに反し、農村では誰々はどここの人だ、どれだけの地持ちだなどと言はれ、常に土地と關係を保つて呼ばれるといふ特色が存してある。人生れて六歳になれば口分田として、男子二段女子は其の三分の二を與へられる大化改新の制

度に溯つてみても、土地に即した農民の空間的根柢が重要視すべきものたるを知るべきである。而して大化新制に於ては、口分田を與へられてゐる一人前の男子に租庸調の義務が課せられて、納税觀念に於ても、農民に確實性の置かれる所以たることは、古制を顧みて痛感せられる次第である。

岐阜縣大野郡白川村は、大家族制度で有名な村で、その特異な制度は、人が土に關聯して生きたために生し來りしものである。而かもこれ迄の村民が永年苛酷な自然の試練に耐へて自ら抑制して以て、人間の手で産み出して來た制度なのである。蓋しこの村のやうに天恵の少いところでは、小家族に分散せず、大家族でもつてやつて行く方が得策なのである。否な更に進んで言へば、生活に不可欠な條件だからといふ點に存するのである。この村では地形上耕地が少しづつ山腹に沿ふて散在して居り、且つ家屋敷に適するほどのまとまつた地面が非常に少ないので、家を建てるに勢ひ同じ場所に建てねばならず、其の結果數戸の家があるとしたならば、其の耕作すべき土地は、半里か一里若くはそれ以上の距離に互つて散在しなければならぬ。さうなると、人手が少なうては農事や家事の進行に差聞えを生じ、生活をたてて行くことが到底望むべくもない。生活をたてて行くには、どうしても人手を多くして、或るものは専ら農業に、或るものは主として家事に當るといふ具合に、分業に依る協力を必要とするに至る。換言すれ

ばこの土地では、小人数の家は初めから問題にならず大家族にして初めて存立の可能性があるのである。而して結婚についても、長男以外は正式の結婚は許さないことにして人口の制限を行つてゐる。この事は到底嚴格に勵行出來ず、人情の自然から内縁關係が生じて、二三男も子をもつことになるのであるが、それは人手を多くする原因として反つて往々喜ばれるから犯則も黙認される次第であるが、この二三男結婚禁止と世帯を分けることの禁止との二つが大家族制の基本的根幹をなすものである。従つて段々道路交通が開けて來て、離村といふことが容易になつたらば果してどうなるであらうといふことが極めて興味のある問題となつてあらはれる。冬季數ヶ月間は他との交通が全く杜絶するといふ位の僻地である爲め今迄は離村の便宜に恵まれません、人心も亦自然時世遅れ退嬰的となり進取の氣象に乏しい爲め、里人自身にも離村の念がなく、殊に一度離村の風が盛んにでもなると、この生命とも言ふべき、生産に協力すべき相當人数の働き手に不足を來たすかも知れないと云ふ心配から、以前には家出した家族のものを家長が連れ歸つたと云ふほどに、家としては、家族の離村を極力防しななければならぬ事情にあつた。併し時運の進歩は到底かくある儘で推移することは許されず、近來白川村の娘たちは、行儀見習のため一度は都會地に行つて奉公するし、また村の長瀬には發電所の工事のため多數の外來人も入り込んで來たし、昔ながら

の白川村ではなくなつて來た。少し古い統計ではあるが、この村と全國各農村との人口層の比較表をつくつて調べてみると、白川村では他に比し幼年者が少く、青壯年者が多いことになつてゐる。これは二三男の正式結婚禁止制度のお蔭で、禁を破つて生れた嬰兒が健康無比ならば、村民協力して之を育て、虚弱な嬰兒は醫療の届かぬ所から自然淘汰されてしまふからと思はれる。而して七十歳以上の老年者が非常に多いのが著しい。之は村民一同が自肅的生活を常を守つてゐる賜物に他ならないのであり、死亡率も従つて低いのである。

人口千につき	白川村	大野郡	全國
田	三〇・九	三〇・八	三二・四
庄	一八・六	二二・三	二〇・七
死	一一・三	八・五	一一・六
自、然 増加			

白川村は自大正十四年至昭和七年八ヶ年平均、大野郡は昭和六年、全國農村は自大正七年至昭和二年十ヶ年平均

斯る結果を呈するについては、實に家長は大家族内に於て、絶對の權力を行使するもので、前記の如く二三男の内縁關係あるものでも内縁の妻を家長の家に迎へることは出來ず、生れた子供はその實家で養育される。家長が世帯の經濟上の一切の切り盛りをなし、家族としては衣食と時折小遣錢を給せられるほか別に自己

の収入をもたない。唯休日には云はば内職として焼畑を拓いたり、他に傭はれたりして得た所得だけを自分のものとして、内縁關係の妻子に與へることが出来るのである。また日常生活上も家長は他のものと別扱ひにせられ、例へば、團爐裡の席なども、家長のは「ヨウザ」といつて、他の者は絶対にそこに坐はれないのである。一頃の話では食物までも別にし、家長が米の飯ならば、他の家族は麥や神の混つた飯、家長が混り飯なら、他の家族は一層混合の度の多い飯といつた具合の區別があつたとのことである。

今では越美南線の白鳥驛から若干の里程はバスも通ずる様になつたし、今後道路の修築の進行するにつれて、この白川村も亦時の勢に推されて變貌を呈するに至るべきは蓋し必然であらう。然

## 比島の道路と自動車

る場合に於て、土地に關する愛着や、貯蓄の手近なよき動機、協同心、宗教上の篤信等從來保有し來りし幾多の美點が相當に保存せられるならば至極結構なことと思ふ。道路改良の結果は人をよりよくし、よき文化に導入し、よき社會形態と古來の美風を害はずして之を助長するを尊しとせざるを得ない。重ねて言ふ。都會人と異なる特別の農民心理は、決してその先天的素質に基くものでなく環境に支配せらるること甚大なるが故に、交通の發達により入り込み易き都會の惡風を防遏すると共に離れ去らんとする古來の美風を殘留せしむるに格段の努力が拂はなければならぬ。白川村に就てみて特にこの感を深くして禿筆を呵し讀者諸賢に問ふと云爾。——一八・八・三〇——

清野謙六郎

ジャワ、マライと並んで南方圏中優秀を謳はれる比島の道路も、其の發達を來したのは米國領有後（一八九八年）の事で、さほど